

教育長室だより

第 18 号

2020.2.7

2月に入り、立春となりました。暖冬とはいえここまで雪を全く見なかったことが記憶にあるでしょうか。寒いのも困りますがこれだけ暖かいと不安にもなります。自然環境を守ることについてはこれまでも多くの議論がありますが、最低限みんなで考えることが次代に対する責任のように思います。

インフルエンザが流行し町内の3校で学級閉鎖、学年閉鎖がありました。そろそろピークを過ぎたでしょうか。今また新型のウィルス性肺炎の感染が大きな問題となっています。両者に共通する対策の一つが「ていねいな手洗い」のようです。できることはやっていきましょう。

○

今回は学力について考えます。

小・中学校の学力は全国共通の学力テストで測られていますが昨年度の結果によると上位と下位の県の差が小さくなってきているのが特徴です。すべての県で学力向上が取り組まれているので当然といえば当然です。いわゆる“傾向と対策”のような効果も出ていると思われます。

また、本県の小学校では従来、基礎学力を問うA問題と応用力を問うB問題とでA問題の好成績の反面B問題の低調さが問題となっていました。A、Bの区分けがなくなりB問題中心の出題となったことで今年の本県は苦戦しました。

○

学力調査でもう一つ注目されているのがPISA調査と呼ばれるOECD(経済協力開発機構)の学力調査です。15歳を対象に3年に一度行われますが、ここで日本の子どもたちの問題となっているのが“読解力”の低さです。

この“読解力”は単に“文を読んで理解する力”というだけでなく様々な資料を読み取る力を含むもので、簡単に言えばものごとの“意味を理解する力”という言い方に近いと考えられます。

そしてこれは学力の基盤を成す重要な力だと考えられます。学校のテストの点が取れるというだけの学力ではなく、ものを考え、判断し、表現するという人生において生きて働く力の中心だと考えられるからです。

○

それではこの“読解力”を育てるにはどんな方法が効果的なのか。

この答えはもちろん簡単ではありませんが、一つ言えることは“読解力”は基本的に言葉の力だということです。ですから当然読書も大きな力になるはず。さらにどういう言葉をたくさん聞いた経験があるか、どういう文をたくさん読んだ経験があるか、そして話し言葉や書き言葉でどのような表現を経験してきたかが大切になります。“読解力”は理屈を理解する力や理屈で説明する力＝論理力とも重なるところが大きいと思われます。

○

次の問題を考えてみましょう。

一問目。

「グリーンランドの大部分や南極は氷雪気候で、夏でも平均気温が 0°C 以下のため、一年じゅう雪や氷で覆われている。」

この文章が正しいとき、次の文は正しいか、まちがっているか、これだけでは判断できないか答えなさい。

「グリーンランドの一部は氷雪気候ではない。」

①正しい ②まちがっている ③判断できない

(※ 新井紀子『AIに負けない子どもを育てる』より)

答えは「①正しい」です。ちょっと考えて「③判断できない」と答える人もいると思いますが、問題文の「グリーンランドの大部分は」の箇所に着目して読むと全部ではないことが解ります。

ではもう一問。

「この学級のほとんどの男子と女子は毎朝冷たい水で顔を洗っている。」

この文章が正しいとすると次の文は正しいかまちがっているかそれとも判断できないか。

「この学級の一部の男子は顔を洗わない日がある。」

①正しい ②まちがっている ③判断できない

答えは③ですね。なぜかというとならぬ毎朝温かいお湯で顔を洗っているかもしれないからです。

○

これらはそれほど難しい問題とは言えませんが、“文をきちんと読む”ことができないとつまづいてしまいます。読解力のもとはこのように言葉の意味を一つ一つきちんと理解して考えることにあります。それくらいできるだろうと考えますが、意外なほど子どもたちはていねいに読みません。

考える力や判断する力はこのように文に即してきちんと理解するところから始まります。会話や文の言葉をしっかり理解するという事です。

○

今の子どもたちはパソコンやスマートフォンなどは驚くほど自在に使います。ほとんど教わらなくても習熟します。反面、文や資料の読み取りは雑なところがあります。そしてその雑さが思考力の伸びを邪魔し、判断力を高めることを阻害することがあるのだと思います。

○

どのようにすれば読解力≒学力が伸びるのかは簡単でないのですが、ふだんから短い単語だけでなくきちんと文で会話することも一つ大事ではないかと思ひます。